

国立民族学博物館の収蔵品 ②

東南アジア展示場の囲炉裏



東南アジア展示場に演出された台所空間

東南アジア展示場に囲炉裏がある。北部ベトナムの山間盆地に住むタイの家族が家を改築する際に、火棚ごと引き取ったものだ。二〇一五年三月にお披露目する前に、実は困ったことが起きていた。囲炉裏の中央で、五徳の役割をする三つの石の配置をめぐってである。私の経験では、どの家でも正面（展示場だとマネキン側）に一つ、奥に二つという配置だ。ところが、民博が引き取る前の写真を改めて確認すると、おどろいたことになんと正面に二つ、奥に一つだった。ター

イの知り合いに聞いてみたが、「薪をくべるには、正面に一つだろう」と、私の意見を押ししたので余計に困った。火を司り、家族の安寧を預かる大切なカミが宿る石である。いい加減なことは許されない。思案の末、結局はもとの家のとおり配置した。

その石の上に鍋、そしておこわを蒸す蒸籠が乗っかっている。周りには調理道具がある。火の世話をするタイの女性（マネキン）までいる。炉端で炙っている魚など、背開きした実際のコイから型取りした傑作だ。もちろん火棚の高さなども実測どおりである。こうして、生活感のある囲炉裏周りが演出された。

これは厳密な意味での再現展示ではない。たとえば、この台所空間にある酒の蒸留器や竹製水筒など、たしかに同じ地域のタイの伝統的な生活用具には違いないが、囲炉裏を所有していた家族が使っていたものではない。しかも半世紀も前に使われなくなった古物である。藤椅子に腰掛けている女性も、ラオスに住むタイの衣装を着ている。火棚の上で煙に燻されている竹製品にはカンボジアのものが混じっているし、水甕にいたってはインドネシアでの収集品まで含んでいる。これでは、再現展示というよりイメージ展示である。「ホンモノの文化」というものがあるのかどうかはともかく、よそ者の勝手なイメージに基づいた文化表象は、現地の人たちの自意識や誇りを傷つけてしまう危険性がある。その意味で、極めて危っかしい。だが、中国製の電気釜やプラスチックの洗面器などを置くような再現もしたくなかった。

わざと狙った面もある。まず東南アジアでは、民族と地域をこえて、同じか、かなり似かよった道具がしばしば分布している。他の地域や集団の文化や流行を、かなり柔軟に取り入れあってきた結果だ。たとえば台所空間にある食器棚など、タイの村ではありふれたものだが、一九八〇年代にベトナムの都市部で流行した食器棚の模造品である。これくらいのごちゃ混ぜなら、タイの人たちにとっても許容範囲だろう、というラインを見越した展示にした。そうすることで、東南アジア展示のメインテーマである「異種混交性」の表現をたくらんだのだ。「ウソっぱちな展示だ！」というお叱りは、まだ東南アジアの人たちから受けていない。

（樫永真佐夫）